原　　文

指摘事由

リットン報告書の内容として不正確である。

p.106　12－19行

満州国の成立

関東軍は，満州の独立を進め，1932（昭和7）年，清国最後の皇帝であった**溥儀**（ふぎ(ブイ)しっ）1906～67を執政（せい）とし，**満州国**（まんしゅうこく）の建国（けんこく）を宣言させた。[2] 日本の一連の行動を侵略であると非難する中国の訴えに応じ，国際連盟はリットン調査団を満州に派遣した。調査の結果，満州事変は日本の侵略であるとの報告書が作成された。

一方，リットン調査団の報告書（リットン報告書）の公表に先だって，日本は**日満議定書**（にちまんぎていしょ）を結び，満州国を正式に承認した。

[2]満州国の実権は，関東軍司令官がにぎっていた。また，1932年からは，日本から農業開拓移民（のうぎょうかいたくいみん）が送りこまれ，満州の開拓にあたった。移民は敗戦までに30万人をこえたが，ソ連参戦時の混乱で多くの犠牲者を生んだ。

修　正　文

満州国の成立

関東軍は，満州の独立を進め，1932（昭和7）年，清国最後の皇帝であった**溥儀**（1906～67）を執政とし，**満州国**の建国を宣言させた。[2] 同年，斎藤実（1858～1936）内閣は，**日満議定書**を結んで，満州国を正式に承認した。

一方，日本の一連の行動を侵略であると非難する中国の訴えに応じ，国際連盟はリットン調査団を日本・中国・満州に派遣した。その結果，満州国は自発的な民族独立運動によって成立した国ではないとする報告書（リットン報告書）[3] が作成された。

2 満州国の実権は，関東軍司令官がにぎっていた。また，1932年からは，日本から農業開拓移民が送りこまれ，満州の開拓にあたった。移民は敗戦までに30万人をこえたが，ソ連参戦時の混乱で多くの犠牲者を生んだ。

3 報告書では，柳条湖事件以来の日本軍の行動を，正当な自衛手段とは認めていない。

番号 11 の関連修正（脇注の追加により，以降の脇注番号を修正。また，「斎藤実」は p.106 で初出となったことによる修正。）

p.107　8行，16行，脇注

軍部の台頭

満州事変がはじまったころから，軍部の急進派や国家主義者のなかに，国家の危機を武力行使による直接行動で打開しようとする動きが活発になった。

1932年2月には前大蔵大臣の井上準之助が，3月には三井合名会社理事長の団琢磨（1858～1932）が血盟団員[3]に暗殺された。5月には，海軍の青年将校らが首相官邸を襲撃し，犬養毅首相を射殺した（**五・一五事件**）。これによって，護憲三派内閣以来，8年間続いた政党内閣は終わりを告げた。

国際連盟の脱退後，陸軍内部には，国家をどのように改造するかをめぐって，天皇みずから政治をおこなう体制を武力によってめざす皇道派と，官僚などを利用して合法的に国家総力戦体制をめざす統制派との対立が生じた。1936（昭和11）年2月，皇道派の青年将校らはクーデタをおこし，首相官邸や警視庁などをおそい，斎藤実（1858～1936）内大臣・高橋是清蔵相らを殺害した（**二・二六事件**）。

削除

[3] 国家主義者井上日召のもとに集まった人々で形成されたグループ。

軍部の台頭

満州事変がはじまったころから，軍部の急進派や国家主義者のなかに，国家の危機を武力行使による直接行動で打開しようとする動きが活発になった。

1932年2月には前大蔵大臣の井上準之助が，3月には三井合名会社理事長の団琢磨が血盟団員[4]に暗殺された。5月には，海軍の青年将校らが首相官邸を襲撃し，犬養毅首相を射殺した(**五・一五事件**)。これによって，護憲三派内閣以来，8年間続いた政党内閣は終わりを告げた。

国際連盟の脱退後，陸軍内部には，国家をどのように改造するかをめぐって，天皇みずから政治をおこなう体制を武力によってめざす皇道派と，官僚などを利用して合法的に国家総力戦体制をめざす統制派との対立が生じた。1936(昭和11)年2月，皇道派の青年将校らはクーデタをおこし，首相官邸や警視庁などをおそい，斎藤実内大臣・高橋是清蔵相らを殺害した(**二・二六事件**)。

[4]国家主義者井上日召のもとに集まった人々で形成されたグループ。